

NHKを退職されて、色々な方面からお誘いがあったと思いますが、あえて熊本県の県立劇場の館長を引き受けられたらさきさつ、理由は何でしょうか。

鈴木館長 「人生というのは感動なしには生きられない」というのが私の一つの生き方のテーマであって、私の残された人生というのは10年ぐらいいであらうと思われませんが、その時に意気に感じて生きていくというのはいんじやないか、そう思いました。その時考えたのですが、皆さんがご覧になる私というのは、ブラウン管や本などを通じて拡大されたいわゆる虚像としての私でありまして、実像の私は36年間実直に勤めあげた「サラリーマン」、あるいは放送現場の職人にすぎません。虚像としての自分は外からご覧になると沢山の方を存じ上げているように思われるかもしれませんが、実像としての自分は、今申し上げたような立場でありまして、実際手を取り合った人間とい

うのは実に少ないんですね。それで私は、何の才能もない人間をここまで来させていただいた視聴者の方々、あるいは読者の方々に、残された人生の中で、なんとかご恩返しをしたい、そして必要なことは、自分がこれから人生を閉じるまでに、実際にブラウン管や本を通じてではなくて、自分自身で手を握れる人間を何人作ることができ

か、それが私の残された人生にやるべきだった一つの仕事のように思っていました。ですから定年の時の記者会見の時には、できれば自分が可能な範囲の仕事としては、小さな塾を作って、そこで皆が人生の勉強をしあえるような場所を作ることではないか、そういうふうな思っていました。そして、その場としては東京ではなかなか自分の考

えていたようなことはできないのではないかな。そのためには、地方がいいんではないかと思っていました。熊本の文化行政について知事から色々なお話を伺いました。肥後学とか新しい美術館の構想とか、あるいは県全体の文化のありかとか。それに大変共鳴いたしまして、私がお手伝いできる部分がありましたらよろこんでお手伝いしますという事でお別れをしました。

知事はなぜ

「鈴木さんを館長に」と思われたのですか。

細川知事 色々な分野の優れた人材に熊本に来ていただくことが、一番地域の活性化になるわけです。

なんとといっても、人材の誘致が大事だと思っているのは、それはもう鈴木さ

んのような方だと、そのうしろには、大変な情報をお持ちだし、鈴木さんおひとり来られることによって、計り知れない色々なものが一緒にくっついてくるわけで、それによる地域の活性化

化への効果というものは計り知れないものがあるだろうと思っています。そういうことをお願いをしました。

「気づけばひのすすめ」などで有名な、元NHKアナウンサー、鈴木健二さんが、7月1日付けで県立劇場館長に就任されました。

熊本でどのような活動をされるのですか。

鈴木館長 文化というのは、行政の範囲の中でやる場合に、二つの方向があると思います。一つは行政が上から引っ張り上げていく力と、もう一つは、下から盛り上がりつつくるもの。この二つがないと文化というものは成り立ちにくい。下からあがってくるものと上からの力がどうしたら結びあうことができるのか。私はそのことのために三年、五年の時間をいただきたいと思っています。

細川知事 館長というのはあくまでも一つの拠り所であって、ここを拠点にして、どんどん出撃してもらいたいと考えています。色々な分野に、教育に、塾でも結構、生涯教育に、社会教育に、

県内の大学に、県外の大学もあるかもしれないが、ここに長い間拘束してしまおうということにならないように、自由に活躍していただきたい。

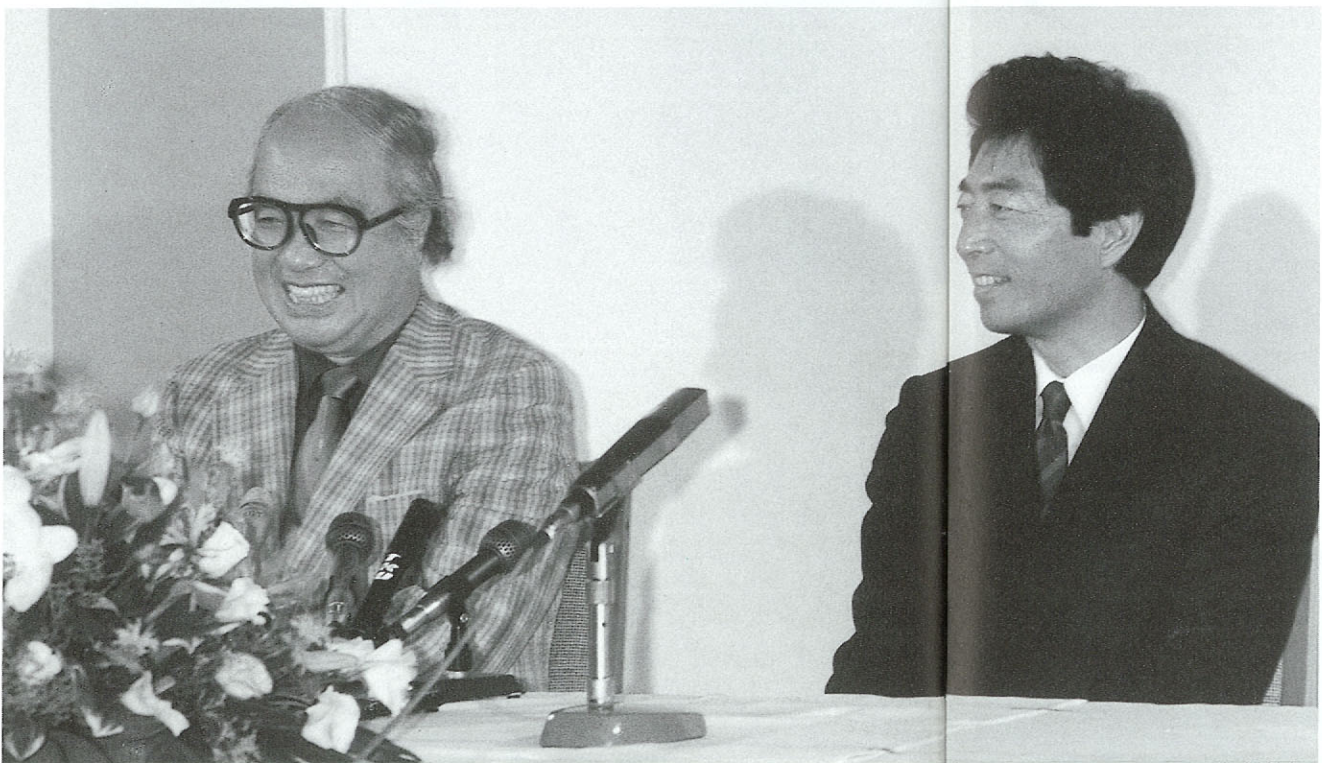
鈴木館長 私はこの県立劇場という、他とは違った名前を持っているかぎり、行動する劇場的なものを作っていくかねばいけないのではないかと思っています。今、知事さんのお話にあつたように、ここを拠点として行動する劇場的な要素を作り上げようと考えています。文化というものは、一箇所に停滞しているものではなくて、広く、大きく、行動を起こすことの中から文化を作っていく時代ですので、そういうふうな気構えのある劇場というものを漠然とですが考えているところでです。

熊本は、東京から見れば南の離れたところでもあるし、全国的な活動をする上で交通面、経済面で不安があるのでは？

鈴木館長 年老いてから細川家に客分として仕えるのは、宮本武蔵そっくりです。私には「五輪の書」を書くことはできないのですが、せめて「文化の「輪」」ぐらいは三年から五年のうち

皆さんから聞かれるのですが、私にとりましては、率直に言うと、住むなんていう生易しい考えで熊本へ来たんだはないということですが、私は人生を賭けて熊本へ参りました。そのためには私の努力と、県民の皆さんにどれくらいご支持いただけるか、そして知事さんにどのくらいご援助い

ただけるか、そういうことが、私が熊本に定住するかしないかの決め手になると思います。私が定住したかしないかというのは、私自身何の得にもなく申し上げますが、それは、私の棺おけのフタを閉じたときに決まる問題だと思います。



鈴木さんが熊本県を中心に頑張られるということは、熊本の皆さんにとつては、大変に素晴らしいことだとは思いますが、たまた全員の鈴木ファンにとっては一抹の寂しさがあるのではないかと思われますが……。

鈴木館長 全国の皆さんがご存じの私は、冒頭に申しましたように虚像の私なんです。実像の私は実直に勤めあげた一放送現場の職人にすぎないので、在職中からも常に実像としての自分を見失ってはいけないんだということを戒めとして生きてまいりました。

ですから、この劇場の仕事をさせていだいて、そして熊本県のことをよく知って、これから落ち着きましたら、熊本県内を精力的に歩いて、熊本県を知りたいと思っています。そしてもし可能ならば20人ぐらいのグループを少しづつ作っていきたくて考えています。それが私の実像であつて、全国のファンの皆様にはその点を是非ご了解いただいて、あれが本当だ、あの男なんだという風に認識いただけたらありがたいと思っています。

(共同記者会見より)

